

保育内容環境におけるアクティブ・ラーニング型の 授業デザイン

—秋の自然に関する保育活動を通して—

河野 崇

1. はじめに

グローバル化、労働市場の変化、生産年齢人口の急減など、社会は急速に変化をしており、予測できない未来が到来しつつある。「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」では、こうした世の中の変化について、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子どもたちに育むことはできないとしている⁽¹⁾。

予測不可能な社会に対応するために、従来とは違った能力が求められている。こうした時代の要請に対応するため、近年、教育現場において、アクティブ・ラーニングの導入が図られている。文部科学省は、アクティブ・ラーニングについて、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」としている⁽²⁾。アクティブ・ラーニングの定義について、田中（2016）は、「アクティブ・ラーニングとは、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的・創造的な学びであり、習得・活用・探求という学習プロセスに沿って自らの考えを広げ深める対話を通して、多様な汎用的能力を育てる学習方法である」と述べている⁽³⁾。また、田中（2016）は、アクティブ・ラーニングで育てたい資質・能力について、主体性、協働性、創造性、自己決定力、問題解決力、自己成長力の6領域18項目にまとめている⁽⁴⁾。

従来型の一方向的な知識伝達型講義では、授業の大半が知識の習得に費やされ、身に付けた知識をテストやレポートに記述することで、単位が認定されてきた。しかし、こうした授業では、身に付けた知識を活用したり、学んだことを他の場面で生かしたりするなど、汎用的能力を育成することは難しい。保育者としての視点で考えてみると、保育の理論を学ぶことはできるが、それを現場で生かすための実践力が身につかないという状況に陥ってしまう。問題発見や解決のプロセスの中で、知識・技能を活用すること、必要な情報を選択すること、相手や状況に応じた表現、判断や意思決定を行うことなど、新たな学びの場が必要になるといえる。

アクティブ・ラーニングを導入した授業を行うことで、理論と実践力をつなぐ、教授方法の在り方を考えていきたい。

2. 「保育内容 環境」とは

幼児教育では、指導法の科目として5領域が設定されており、健康、言葉、人間関係、環境、表現の5つがある。特に、これら5領域は指導法としての位置づけとして、相互に関連しており、子どもが園生活を通しての体験を通して、他の領域の内容とともに総合的に指導がなされている。それぞれの領域についての確かな理論と、理論を基にした実践力を身に付けていくことが、保育者としての総合的な専門性を高めていくことになるといえる。

そこで、本論文では、5領域の1つである、「保育内容 環境」の授業において、アクティブ・ラーニング型の授業デザインを考えていく。「保育内容 環境」は一般的に演習科目として位置付けられている。演習科目は教職課程において、指導法という具体的な指導内容を学ぶ科目として、授業で学んだ知識や技能を生かしながら、子どもに指導できるように授業を組み立てる必要があるといえる。

「保育内容 環境」の内容は、具体的には、例えば、1. 栽培、2. 飼育、3. 科学遊び、4. 自然現象、5. 交通ルール、6. 地域行事への参加、7. 仕事、8. 地域の環境、などがある。

それでは、理論と実践力を総合的に身に付けていくために、どのような授業デザインが考えられるだろうか。手立てとして、次の3つを用いることにする。

○手だて1

アクティブ・ラーニング型の授業デザインとして、教師が90分間講義する授業スタイルから、学生主体による学びの質の転換を図る授業をデザインする。

○手だて2

学生による教材紹介や模擬授業を授業時間に位置付ける。グループで発表する教材を話し合い、ねらいと内容、保育の流れ、保育者の援助や留意点の検討、指導計画案の作成、教材紹介や模擬授業の準備、実施、検討を行う。

○手だて3

体験→内化→外化のプロセスによる授業を構想する⁽⁵⁾。学生が身に付けた知識や技能を活用することまでを想定した授業をデザインする。

3. 授業概要

以下、授業の流れに沿って、3つの手だての具体的内容を述べていく。まずは、15回の授業計画である。授業計画として、次の流れでシラバスを作成している。

表1：「保育内容 環境」のシラバス

授業科目名： 保育内容 環境	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 1 単位	担当教員名：河野 崇 担当形態：単独
科 目	領域及び保育内容の指導法に関する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	保育内容の指導法		
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>領域「環境」のねらい及び内容について理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。また、幼児の「科学する心」の意義や「自然や社会を大切にする態度」が育まれるための身近な環境について知り、その育成方法を模擬的に実践することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>幼稚園教育要領に示された領域「環境」のねらい及び内容についての理解を深め、領域「環境」に関する教材研究に取り組み、その指導案を作成する。また、製作や栽培、自然環境への関わり、伝統遊びなど、具体的な遊びや活動を体験し、情報機器及び機材の効果的な活用方法を含め、保育者としての実践的関わり方について学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーションー本講義の進め方について 学内散策*植物マップ作成。 第2回：グループに分かれて、野菜を植える。 第3回：身近な物を用いた教材研究① 生き物の飼育方法と留意点（昆虫を含む）成長を知る遊び。 第4回：身近な物を用いた教材研究② 自然を通して遊ぶ（空気、水、光）。 第5回：身近な物を用いた教材研究③ 身近ないろいろな音に気付く、音を作って遊ぶ。 第6回：身近な物を用いた教材研究④ 身近な素材で遊ぶ。大きさ、高さ、重さ、触感に気付く。 第7回：フィールドワーク 野外遊びを体験しよう！ 第8回：身近な社会に気付く教材研究① 交通ルールや体の不自由な人への町中の工夫。 第9回：身近な社会に気付く教材研究② いろいろな仕事に気付く。地域の行事。 第10回：身近な社会に気付く教材研究③ 世界について気付く。飢餓、戦争で困っている子ども。 第11回：身近な社会に気付く教材研究④ 地球環境を守るために子どもたちとできること。 第12回：野菜の収穫とそれを教材とした保育活動実践 第13回：領域「環境」に関わる保育指導案作成 ねらいとそれを引き出す遊びや環境構成 第14回：領域「環境」に関わる模擬保育 模擬保育と検討（情報機器及び機材の活用を含む） 第15回：本講義のまとめ</p> <p>定期試験なし</p>			
<p>テキスト</p> <p>主にプリント資料を配付する。</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>（2017）『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領（原本）』チャイルド本社</p>			
<p>学生に対する評価 植物マップ（10%）野菜の栽培記録（10%）授業時の発表と資料（40%）指導案（40%）</p>			

オリエンテーションが1回、野菜の栽培と収穫が2回、フィールドワークが1回設定されている。また、教材研究が8回分用意されている。教材研究8回分の内容は、①生き物の飼育方法と留意点（昆虫を含む）成長を知る遊び、②自然を通して遊ぶ（空気、水、光）、③身近ないろいろな音に気付く、音を作って遊ぶ、④身近な素材で遊ぶ。大きさ、高さ、重さ、触感に気付く、⑤交通ルールや体の不自由な人への町中の工夫、⑥いろいろな仕事に気付く、地域の行事、⑦世界について気付く、飢餓、戦争で困っている子どもたち、⑧地球環境を守るために子どもたちとできること、の8回である。そして、領域「環境」に関わる指導計画案作成、模擬保育と検討、まとめの計15回の授業計画である。

ここからは、教材研究8回について、具体的な授業の流れを見ていく。

4. 教材研究

8回ある教材研究の流れについて詳しく述べる。第3回の身近な物を用いた教材研究①、第8回の身近な社会に気付く教材研究①では、教員がテーマに応じた教材紹介を行い、発表の見本を見せる。第4回から第6回、第9回から第11回の授業の中で、学生による教材紹介を位置づけている。この授業回では、90分の授業を次のように時間配分する。

10分教員から理論面の説明、40分学生による教材紹介、残りの時間で学生による教材紹介の検討の計90分である。

最初の10分で、教員から保育内容の理論面について説明をする。例えば、秋の自然に関する保育活動では、幼稚園教育要領のねらいや内容との関係、自然と関わる意義や教育的効果、秋の自然に関する具体的な保育内容、秋の自然を取り上げた保育環境や保育者の援助など、秋の自然に関する保育活動について、概要やポイントについて説明をする。

なぜ、自然と親しむのか、秋の自然に関する保育活動を取り入れることで、子どもたちの成長にどのように影響し、どういった資質・能力の育成が期待できるのかをしっかりとおさえることは、保育を実践する上で大切なことである。


実際の授業では、保育内容環境のねらいを実現するための保育者の役割、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿と秋の自然をテーマにした保育活動との関連、秋の自然に関する保育活動の実際、保育者の援助や留意点などについて、次のような資料を用いて説明をしている⁶⁾。

資料 1

保育内容環境のねらい

- ・身近な環境に親しみ、**自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。**
- どのような保育環境を用意したら良いか？
- 保育者の援助として、どのようなことができそうか？
- ・身近な環境に自分からかかわり、**発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。**
- どうしたら身近な環境に主体的に関わることができるのか？
- 発見を楽しんだり、考えたりするために、どのような活動が考えられるか？
- 生活に取り入れようとするとはどのようなことか？
- ・身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、**物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。**
- 文字や数量を扱った保育活動とは？
- 感覚を豊かにするために必要なことは何か？

資料 2



秋の自然に関する保育内容の具体的場面


**自然との関わり・生命尊重
豊かな感性と表現**

身近な自然に触れ親しみながら、子どもは「わあきれい」「すごいなあ」と心を動かし、「どうしてだろう、不思議」と知的好奇心を膨らませ、「なぜ」と先生が戸惑い驚く疑問を投げかけてきます。

→「どんぐりが茶色になっちゃった、おばあちゃんになったのかな」、などと、友達と感動を伝え合うことで、友達と気持ちを共有し合いながら、**自然に対するかかわりを深めることができます。**

→「この赤ちゃんどんぐり、小さくてかわいい」と共感し合いながら遊んだりすることで、**子どもの気付きや考えを深めることができます。**

資料 3



思考力の芽生え

日々の生活で子どもは知らず知らずのうちに自然のサイクルに気付き、法則性にひきつけられ、確かめてみようと思う気持ちが湧いてきます。

→これは**思考力の芽生えを培う場でもある。**

どんぐりや葉っぱ、木の実などは、自分で見つけて採るという体験もでき、また、色や大きさ、形が少しずつ異なっていることが、**子どもの思考力を刺激することになります。**

秋になると葉っぱの色が変わったり、落ち葉がたくさんあることに目を向けさせる。

→どうしてだろう、なぜだろうと、**科学的な見方や考え方の芽生えを培うことにもつながる。**


保育内容環境では、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを目的としている。子どもの興味関心や好奇心、探求心を高めるような保育を実現するために、保育者の役割が大変重要である。資料 1 は、自分が保育者になったときに、保育内容環境のねらいをどのように実現していくのかについて、考えるきっかけにさせるための資料である。

資料 2 は、身近な秋の自然に親しむことで、子どもたちの感性を豊かにし、自然の雄大さに感動する気持ちを抱かせることについて説明した資料である。保育者が、自然に対する子どもたちの感動を、友達同士共有する機会を設定したり、子どもの疑問を一緒に受けとめながら、興味を深めるような援助をしたりしていくことで、子どもたちは、自然に対する畏敬の念を持ち、親しみの気持ちを抱くことができる。保育者が、子どもの気付きや考えを受けとめて、共感をしていくことで、友達に伝える喜びや、もっと知りたいという意欲につながっていくのである。

資料 3 は、秋の自然を観察することと、思考力の芽生えとの関連について説明した資料である。どんぐりや葉っぱを拾う活動を通して、形や大きさの違いの不思議さを感じさせたり、秋になると葉っぱの色が変わったり、落ち葉がたくさんあることに気付かせたりすることで、子どもたちの思考力を刺激することができる。どうしてだろう、なぜだろうという気持ちから、科学的な見方や考え方の芽生えにつながっていくのである。

資料 4


**数量・図形、文字等
への関心・感覚**



どこから数えても同じことや、いろいろな物が数えられることを理解していく幼児期は、正確に数えるよりも、**数量の感覚を豊かにしておくことが大切**だと言われます。
→こっちの花びらが5枚、こっちは4枚、1枚とれちゃったのかな。
葉っぱには色々な形や大きさがある。三角の葉っぱを組み合わせると四角になるなど、**考えながら形と触れ合う**こともできる。
→**数や形を知ること**で、**生活が豊かになることを、子ども自身が感じる**ことが大切です。

資料 5

**自然との関わり・
生命尊重
道徳性・
規範意識の芽生え**



見る、触れる、聞く、味わう、においをかぐなどを通して、興味をもったり、関心をもったり、気づいたり、疑問に思ったり、考えたり、知識を得るなど、五感を使った活動は**探究心を持つには最適な**もの。
→**五感を意識して秋の自然に親しむ保育活動を行う**ことの大切さ。これは取らないでおきましょう、かわいそう、たくさん取ると少なくなっちゃう。
→道徳性など、**公共心**も育てられていきます。
周囲の身近な自然環境は、子どもの好奇心や探究心を揺さぶり、思考力を刺激し、道徳心を育てていく。

資料 6

フィールド・ビンゴ

探検に出かけ、葉っぱやきのこや木の実など、秋の自然を探すフィールド・ビンゴを通して、**自然に親しみ、五感を意識しながら秋の自然について学びます。**

1. フィールド・ビンゴカードの作り方をともに、発見できそうなものを考えて、フィールド・ビンゴカードをつくります。
(木の実、赤い葉っぱ、ぎざぎざの葉っぱ、鳥の鳴き声、いいにおいのする花、ざらざらの葉っぱ、など五感を使ったものをビンゴカードに並べます)
2. フィールド・ビンゴカードができたら、秋の自然探検に出かけます。探し当てたものに○印をつけ、○がタテ、ヨコ、ナナメのいずれかに3つ並んだらビンゴ完成です。
3. グループに分かれて、みんなで協力して探す遊び方もできます。

好奇心や探求心とともに、友達とグループになって行えば、**かかわりや伝え合い、感動、共感**などの気持ちを養うことができる。

資料 4 は、花びらの数を数えたり、葉っぱの形や大きさに注目させたりすることで、数量や図形、文字などへの関心・感覚を持たせることについて説明した資料である。例えば、葉っぱの形や大きさに保育者が目を向けることで、数量や図形への関心、感覚を豊かにする機会を持たせることができる。幼児期には、日常生活での自らの必要感に基づいて、数量や図形に対する感覚を身につけさせていきたい。こうした実体験が、小学校以降の学びにつながっていくのである。

資料 5 は、秋の自然を観察するときに、五感を使った活動を取り入れることの意義について説明した資料である。自然体験活動において、子どもの好奇心や探究心を高めるために、五感を意識した保育活動を展開することは大変意義がある。この音は何の生き物の鳴き声だろうと、保育者が五感を意識させるような疑問を子どもたちに投げかけることで、子どもたちの好奇心や探究心を揺さぶり、学びへの意欲につながっていくのである。

資料 6 は、秋の自然を取り上げた保育活動の 1 つとして、フィールド・ビンゴについて説明した資料である。フィールド・ビンゴを通して、ドングリ拾いや草花の種集め、落ち葉探しなどの自然体験活動が展開できる。また、遊びの中で、子ども同士伝え合う場を設定したり、友達とイメージを共有できるような働きかけをしたりすることで、それぞれの遊びがつながるように支援をすることができる。友達同士協力しながら活動するなど、かかわり、伝え合いの場を設定することで、感動、共感の気持ちを持たせることができる。

次に、学生による教材紹介の流れを説明する。教員による理論面の説明を参考にして、各テーマに関する教材紹介をグループで話し合い、保育活動、ねらいや準備物、保育の流れ、保育者の援助や留意点について、10分間の教材紹介を考えていく。

資料 7

保育内容環境 授業進行表	
9/14	1回目 オリエンテーション
9/21	2回目 保育内容環境の概要、教師教材紹介、野菜栽培
9/28	3回目 教師教材紹介 ※A班、B班、C班、D班がオリジナル資料提出
○10/5	4回目 学生教材紹介① 発表:(A班)(B班)(C班)(D班) ※E班、F班、G班、H班がオリジナル資料提出
○10/12	5回目 学生教材紹介② 発表:(E班)(F班)(G班)(H班) ※A班、B班、C班、D班がオリジナル資料提出
○10/19	6回目 学生教材紹介③ 発表:(A班)(B班)(C班)(D班)
11/2	7回目 近所の公園でフィールドワーク(予定)
-保育実習2週間-	
11/23	8回目 教師教材紹介、環境に関する記録 ※E班、F班、G班、H班がオリジナル資料提出
○11/30	9回目 学生教材紹介④ 発表:(E班)(F班)(G班)(H班) ※A班、B班、C班、D班がオリジナル資料提出
○12/1	10回目 学生教材紹介⑤ 発表:(A班)(B班)(C班)(D班) ※E班、F班、G班、H班がオリジナル資料提出
○12/7	11回目 学生教材紹介⑥ 発表:(E班)(F班)(G班)(H班)
12/14	12回目 野菜を使った調理実習(生育状況により日程変更あり)
12/21	13回目 保育指導案作成
1/11	14回目 模擬保育
1/18	15回目 まとめ

学生 40 人のクラスであると仮定する。40 人を 5 人ずつの 8 グループに分ける。90 分の授業の内、学生による教材紹介の時間を 40 分設定する。学生の教材紹介では、各グループが 10 分ずつ発表することになる。つまり 1 時間の授業で 4 グループが発表することになる。6 回ある教材紹介の中

で、それぞれのグループは、合計 3 回発表する機会を持つことになり、各グループで役割や担当を話し合うなどして、最低一人 1 回は発表するようにする。

発表内容をグループで考えるとき、まずは保育内容のテーマについて、どのような教材を取り上げるのか、グループで検討することになる。グループ内で意見を出し合い、話し合い、決めるまでに、保育者として必要な資質、能力の育成が期待できる。例えば、取り上げる教材を選択するために、先行研究や書籍、資料を収集したり、実践事例集を参考にしたりするだろう。子どもの発達段階に合った保育内容を考えることも大切である。こうしたことは保育現場に出てから、日々の保育内容を考えたり、指導計画案を作成したりするときの参考になるだろう。子どもの興味や関心、発達に合った教材を選択して、ねらいや内容、進行方法や指示の仕方、保育者の援助や留意点などの観点から、保育内容を計画していくのである。

また、現場に出てからは同僚や保護者、地域との連携・協力が不可欠である。教材紹介をグループで考える過程において、他者と協同して物事に取り組む機会をたくさん持つことになる。教材紹介を発表するときには、友達に分かりやすく発表するための工夫や、興味や関心を引き付けるための手立てなども考えていく必要がある。創意工夫をしていきながら、より良い教材紹介になるよう、話し合いをしていくのである。

受け手側も、友達の発表を聞くことで、子どもの立場に立った難しさや困難さを感じることができ、自分たちの発表の参考にすることができる。また、学生による教材紹介を聞くことで、より幅広い保育内容のアイデアを手に入れることもできる。受け手側に質問や感想の機会を与えることで、主体的な参加を促すことも期待できる。

授業で学んだ知識・技能を生かしながら、汎用的能力を育成する機会を数多く持つことがで

きるといえる。

教員による秋の自然に関する保育活動の理論面の説明を聞いた後、学生はどのような教材紹介を考えたのだろうか。学生が作成した教材紹介資料の一部を紹介する。実際の教材紹介では、この教材紹介資料の一部分について、実際に実演してもらったり、難しい場合は、道具や材料を準備して説明したりするなど、出来るだけ現場に即した形で発表をしてもらう。

表 2：学生作成の教材紹介資料①

保育活動名	ドングリのマラカス	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・自然物に触れる楽しさを味わう。 ・友達とマラカスを振って、音を楽しむ。 	
準備物	ドングリを入れるバック、ドングリ、蓋のある容器、ビニールテープ、マスキングテープ	
時間	保育の流れ	保育者の援助
0:00	<ul style="list-style-type: none"> ○製作をする ・容器を一人ひとりに配り、マスキングテープも各グループに2色配る。 ・容器にマスキングテープを貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が持っているのか確認をして、ドングリは机の上に置くように言葉掛けをする。 ・マスキングテープを好きに貼るように言葉を掛けて、保育者が貼る見本を見せる。
0:15	<ul style="list-style-type: none"> ・容器の中にドングリを入れて、キャップを閉める。 ・キャップのところにビニールテープを貼り、落ちないようにする。 ・完成したことをみんなで共有して、次に何をするのか保育者の指示を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドングリが容器の中に入れられない子どもは保育者が援助する。 ・ビニールテープは、出来た子どもから保育者が貼っていき、マジックで名前を書く。 ・みんなが出来たことを褒めて、次の指示をする。
0:20	<ul style="list-style-type: none"> ○完成したマラカスで遊ぶ。 ・マラカスを振って音を楽しむ。 ・保育者のピアノに合わせて、マラカスを振り、友達と楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「きれいな音だね」など言葉を掛ける。 ・「かえるのうた」や「きらきわ星」などの歌を弾く。
0:30	○片付けをする。	

保育活動は、ドングリのマラカス作りである。ねらいは、自然物に触れる楽しさを味わう。友

達とマラカスを振って、音を楽しむ。内容は、秋の自然物を使ったマラカスの製作をして、完成したマラカスを振って音を楽しんだり、保育者のピアノに合わせて友達と一緒に遊んだりする。保育者の援助は、困難が予想される場面で、保育者が製作の見本を見せる。容器の中にドングリを入れられない子どもに対して個別の援助をする。子どもたちに言葉掛けをする。

表 3 : 学生作成の教材紹介資料②

保育活動名	落ち葉でお絵かき	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・秋の自然物を使って楽しむ。 ・ドングリや落ち葉の音や感触を感じる。 	
準備物	ビニール袋、糊、ボンド、新聞紙、画用紙、濡れタオル	
時間	保育の流れ	保育者の援助
0:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ドングリや落ち葉を集める。 ・落ち葉シャワーを楽しむ。 ・色々な形の落ち葉に触れ、楽しむ。 ・一人一枚のビニール袋をもらう。 ・ドングリや落ち葉を集める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが楽しく遊べるように落ち葉を先に集めておく。 ・友達と楽しく遊べるように、保育者が輪の中に入って一緒に遊ぶ。 ・落ち葉に興味を持てるように形が違う葉を子どもに見せる。 ・子どもたちが落ち葉拾いを楽しめるよう、ビニール袋におばけを描いておく。 ・おばけがおなかをすかせているから、落ち葉やドングリを食べさせてあげようと言葉を掛ける。
0:30	<ul style="list-style-type: none"> ○落ち葉でお絵かきをする。 ・椅子に座り、保育者の話を聞く。 ・落ち葉やドングリを自由に画用紙に貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ、机に糊、ボンド、新聞紙、画用紙、濡れタオルを用意する。 ・何に見えるのかイメージしながら、糊やボンドで自由に貼るようにする。 ・濡れタオルで手を拭くように言葉を掛ける。 ・子どもが楽しく製作が出来るように、「面白い形だね」等、言葉を掛ける。
0:50	<ul style="list-style-type: none"> ・出来た子どもから保育者に渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出来た子どもに、保育者の所に持ってくるよう伝える。

	○片付けをする。 ・絵本を読んで待つ。	・片付けをした子どもに絵本を読むよう言葉を掛ける。
--	------------------------	---------------------------

保育活動は、落ち葉で絵を描くことである。ねらいは、秋の自然物を使って楽しむ。ドングリや落ち葉の音や感触を感じる。内容は、ドングリや落ち葉を集め、集めた自然物を画用紙に貼ってお絵かきをする。保育者の援助は、子どもの意欲を高めるような言葉掛けをする。事前に道具や材料の準備をしておく。製作の指示をする。

表 4：学生作成の教材紹介資料③

保育活動名	草木染めをする	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・植物の性質や仕組みを利用して遊ぶ。 ・身近な素材に触れ、秋の自然に親しむ。 	
準備物	輪ゴム 50 本、白の木綿 20 枚、大きな鍋 1 つ、コンロ 1 つ、箸 1 本、ボウル 1 つ、ざる 1 つ、葉や花、ロープ 5m	
時間	保育の流れ	保育者の援助
0:00	<ul style="list-style-type: none"> ○秋の遠足を振り返る。 ・保育者の質問に答える。 ・友達同士で楽しかったことを 1 人ずつ発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠足の楽しかった思い出を振り返ることができるように、天候や何をしたのかなど、具体的に尋ねる。 ・友達の話聞く力を身につけることができるように、発表する人は前に立ち、緊張感を持たせる。
0:05	○遠足で拾った落ち葉の感触や音などを楽しむ。	・落ち葉が触れ合う音や匂い、感触を味わうことができるように言葉を掛ける。
0:10	<ul style="list-style-type: none"> ○しぼり染めをする。 ・白い布を受け取る。 ・籠の中に入った輪ゴムを取り、かけてきつめに結ぶ。 ・鍋に布を入れる。 ・布に色がついたことを確認し、布を液につける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ手渡しで配り、一枚ずつ配ることが出来るようにする。 ・ゴムのかけ方を繰り返し説明して、自分で挑戦する力を身につけさせる。 ・鍋の中に、花、水を入れて、煮立ったら花のみ取り出す。 ・保育者が鍋を使用して、鍋から布を取り出す。

0:40	<ul style="list-style-type: none"> ・輪ゴムを外して、籠の中にゴムを入れる。 ・保育室にかかっているロープに布をかけて干す。 ○出来上がった作品を鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・籠を 3 つ用意しておき、子どもの模様が交わらないようにする。 ・子どもたちが自分で布をかけることが出来るように、低い位置にする。 ・ロープにかかった布を見て、色々な模様があることを話し合う。 ・活動に達成感を味わうことが出来るように褒める。
------	--	---

保育活動は、草木染めである。ねらいは、植物の性質や仕組みを利用して遊ぶ。身近な素材に触れ、秋の自然に親しむ。内容は、秋の遠足を振り返り、遠足で拾った自然物を使った染め物をして、完成した作品を鑑賞する。保育者の援助は、遠足の楽しかった思い出を振り返るように、質問をしていく。活動の意欲や達成感を味わうことが出来るような言葉掛けをする。作業の事前準備をしたり、子どもでは難しい活動の援助をしたりする。

秋の自然に関する保育活動では、ドングリや落ち葉を拾って集めることで、自然物を使った遊びを展開することができる。形や色の違う葉っぱやドングリなど、子どもの興味関心に基づいて集めた自然物について、「どうしてこのドングリを集めたの」「どの色の葉っぱが好きなの」など、子どもたちの気持ちに問いかけをしていくことで、子どもの内面に広がる興味関心を、より豊かに広げることができる。「面白い形の落ち葉があるね」「なぜ色が違うのだろう」など、子どもたちに問いを持たせるような言葉掛けをしていくことで、子どもの思考力を刺激することができる。

ドングリのマラカス作りでは、作ったマラカスによる音の違いに注目して、どうして音が違うのだろうと、子どもに疑問を持たせるような問いかけをすることで、探求心を高める活動が展開できる。また、こうした遊びを友達と一緒に楽しむことで、関わり、共感する気持ちを育むことが期待できる。ここでは、完成したマラカスを友達同士聞き合うことで、音の違いや仕組みの不思議さに気付かせたり、ピアノに合わせて友達とマラカスを振りながら、気持ちを通わせて遊んだりしている。

落ち葉で絵を描く活動では、ドングリや落ち葉を集める、集めた自然物を画用紙に貼りながら絵を描く、片づけるという保育の流れとなっている。自然体験活動において、秋の自然に親しむ様々な活動を行う中で、集めた秋の自然物を使って、保育活動を展開する 1 つの事例である。子どもの興味関心に基づいて、形や大きさ、色の違いなど、子どもたちが拾ってきた自然物の特徴や性質をうまく生かしながら、それぞれの子どもが、どのような作品を完成したのかを鑑賞し合うことで、共感や感動の気持ちを共有しながら、お互いの良さを認め合うことができる。

子どもが活動に意欲的に取り組めるよう、個別援助や言葉掛けなど、保育者の援助が考えられ

ている。例えば、活動の意欲を持たせるために、遠足での思い出を振り返ったり、子どもが活動に積極的に参加できるように、保育者が子どもの輪の中に入って一緒に遊んだりしている。また、子どもに興味関心を持たせるために、形の違う葉っぱを子どもたちに見せるなどの援助が行われている。そして、活動がうまく展開できるように、事前の準備を行ったり、困難が予想される活動に対する保育者の援助を事前に考えたりしている。

この資料からは子どもの発達や実態を把握することは出来なかった。子どもの発達や実態を基にして、指導計画案を作成することは大切なことである。学生はこれまでの実習で、幼稚園実習、保育園実習、施設実習を経験しており、そのときの子どもの姿を思い浮かべながら指導計画案を作成したことだろう。子どもの発達や実態に即した指導計画案を作成していくことは、今後の課題である。

次は教材研究の検討である。おそらく、指導法を学ぶような演習科目では、教員や学生による事例紹介や、実演などの演習形式の授業がなされることがあるだろう。今回の授業でも、教員による教材紹介の発表や、学生による教材紹介の時間を設定している。そして、学生教材紹介では、残りの時間を使って、教材研究の検討の時間を設けている。友達の教材紹介を聞いたり、体験したりしたことを、学生自身の学びにつなげ、活用できるようにしていきたい。

そのために、体験、内化、外化の3つのプロセスによる授業をデザインする。松下は、一方的な知識伝達型講義では、授業の大半は知識の内化に費やされ、外化といえ、記憶した知識を試験ではき出すことくらいしかなかったと述べている⁽⁷⁾。これに対して、アクティブ・ラーニングでは、「認知プロセスの外化」を学習活動の中に正当に位置づけたことが功績であるとしている⁽⁸⁾。

本授業では、体験、内化、外化について、具体的に次のような内容で行うことにする。体験とは、教員や友達の教材紹介を実際に体験してみることであり、内化とは、教材紹介を体験した後、個々に教材紹介の振り返りを行うこと。外化とは、教材紹介の振り返りをクラス全体で検討したり、授業での学びを生かして、模擬保育などを実際に実践したりすること。

また、内化するときのポイントとして、十分に振り返りの時間を確保することが大切である。例えば、あるグループが教材紹介で、ドングリや落ち葉などの秋の自然物を使った製作を行ったとする。教材紹介の後、①教材選択について、②ねらいや内容について、③保育の流れについて、④保育者の援助や留意点について、⑤困ったり、難しかったりした点について、などの観点から、まずは個々に教材紹介の振り返りをしていく。その後、学生同士交流する時間を確保する。教員は、学生からの意見を聞いていく中で、発表した教材紹介の改善点について焦点化し、どうすれば良かったのか、どのように改善できるのかなど、クラス全体で考えることができるように検討を導いていく。

教材紹介について、このような流れで継続して行うことで、子どもの立場に立ちながら保育

を体験することができ、保育を実践するときの参考にすることができる。

次に、模擬保育について説明する。模擬保育では、学生同士で保育者役、子ども役になって、模擬的に授業を進めていく。授業後には、模擬保育の検討を行い、改善点や問題点を出し合い、授業の向上を図るための観点から話し合いをする。

模擬保育形式の授業は 13 回目、14 回目に設定している。これまでの教材紹介で経験していることから、指導計画作成のおおよその流れは把握できている。グループで模擬保育の指導計画案を作成してもらい、模擬保育の内容や方法を話し合い、実際に授業をする。

授業時間は 90 分あるので、例えば、30 分模擬保育、15 分検討の時間を設定すると、1 回の授業で 2 グループから 3 グループの模擬保育を行うことができる。実施するグループの数や時間など、これまでの授業の様子から、柔軟に実施していきたい。

5. 成果と課題

成果として次の 3 点があげられる。

1 点目に、保育者の専門性を高めるための社会的背景に留意しながら、授業で学んだことを活用する、汎用的能力の育成が期待できる授業をデザインした点である。教材研究をグループで話し合うことで、田中が示した、アクティブ・ラーニングで育てたい資質・能力である、主体性、協働性、創造性、自己決定力、問題解決力、自己成長力の育成が期待できることを、教材紹介の具体的な流れの中で示すことができた。例えば、協働性では、教材紹介の準備をしていく中で、他者と協働して物事に取り組む活動が展開できる。創造性では、教材紹介のアイデアを考えたり、保育の流れをイメージしたりすることで、子どもの活動や保育者の援助について、友達同士アイデアを出し合いながら話し合うことができる。主体性では、教材紹介後に検討の時間を設定することで、友達が行った教材紹介について、より良く改善できるよう積極的に意見交流する機会を持つことができる。子どもの発達や実態に合った教材紹介を考えていくことは、自己決定力の機会となる。こうした学びを総合して、自己成長力の育成につながるのである。

2 点目に、保育者としての専門性を高めるように、授業で学んだことを生かすことまでを想定して、3 つの手だてを盛り込みながら、授業をデザインしたことである。体験、内化、外化のプロセスによる授業構想を行ったことで、授業に系統性を持たせることができた。友達の教材紹介を体験して、クラス全体で改善点を話し合い、その学びを生かして、次の教材紹介を体験し、別の観点から改善点を検討したりしていく。このような学びを継続して行うことで、保育を実践するときの困難さや難しさを実際に感じることができ、子どもの気持ちに寄り添った保育を行うことにつながるといえる。

3 点目に、数多くの教材紹介を体験することで、教材紹介のアイデアを手に入れることがで

きた。また、教材紹介の検討をしていく中で、改善するための視点が見えてきた。学生相手の教材紹介において、進行に困難さや難しさが見られるということは、子ども相手になると、さらなる難しさが予想される。教材紹介を検討した結果、改善点としていくつかの傾向が見られた。取り上げる教材が難しすぎることで、子どもの興味・関心を引き付けるための導入の工夫の必要性、製作の材料や道具の数が足りずに時間差が出てしまうこと、子どもの発達に合わせて事前にどこまで準備するのかを考えることなどが、主な改善点として浮かび上がってきた。

課題として、今回は40人のクラスによる演習形式の授業を想定した。こうした少人数のクラスであれば、グループ活動や発表、模擬保育など、比較的实施しやすいといえる。しかし、受講生が100人を超えるような授業では、今回構想した授業は難しいだろう。こうした大人数での授業において、どのような授業デザインが考えられるのか、さらなる工夫をしていく必要がある。

また、今回考案した授業デザインは検討段階である。新たな課題や問題点、改善点などについて、授業実践を重ねる中で、検討を重ねていきたい。学生の声や評価、データや資料などを基にして、検証を重ね、より良い授業の形を考えていきたい。

※本論文は、2016年日本教育実践学会第19回大会での研究発表をもとに加筆修正したものである。

【引用・参考文献】

(1) 文部科学省 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)」

(2) 文部科学省 (2015) 「新しい学習指導要領等が目指す姿」

(3) 田中博之 (2016) 『アクティブ・ラーニング実践の手引き 各教科で取り組む「主体的・協働的な学び」』教育開発研究所、p.22

(4) 前掲書 3) pp.27-28

(5) 松下佳代編 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』勁草書房、pp.1-27

(6) 柴崎正行・若月芳浩編 (2009) 『最新保育講座 9 保育内容「環境」』ミネルヴァ書房

(7) 前掲書 5) p.9

(8) 前掲書 5) p.9